

# 「気候変動」と「教育」を どうつなぐか

古里貴士

ふるさと たかし  
1979年生まれ  
東海大学課程資格教育センター勤務  
社会教育研究に従事

## 一 気候変動と新型コロナ感染症

本稿の前に、計六本の論稿及び実践報告が掲載されているが、本稿ではそれらを踏まえて、本特集のテーマである「教育は気候変動にどう向き合うか」ということについて、改めて考えてみたい。(なお、本誌掲載の論稿・実践報告から引用の場合は、引用の後に執筆者名のみ記載する)

ところで、「3密」「ソーシャルディスタンス」「新しい生活様式」といった言葉が日常的に飛び交い、感染予防を抜きにしては、社会生活を営むことができないぐらいに、深刻化した新型コロナ問題であるが、わずか一年前には、私たちはまだ新型コロナの存在を知らず、感染症(予防)が、これほどまでに私たちの社会生活を左右する問題となるとは、思ってもいなかった。

二〇一七年に九州北部を襲った豪雨、二〇一八年の「平成三〇年七月豪雨」に引き続き発生した、二〇一九年九月の台風一五号と同年一〇月の台風一九号は、多くの人命を奪い、危険にさらし、生活を苦しいものにした。これは、私たちの意識を「異常気象」や「気候変動」の問題に向けさせる契機となりうる出来事であった。また、東京オリンピックのマラソンと競歩の会場を、札幌に移転せざるを得なくなったほどの記録的な猛暑についても、同様である。例えば、『科学』二〇一九年七月号が、「豪雨・猛暑と温暖化」を特集したのは、その一例と言いうるであろうし、『世界』二〇一九年二月号も「気候クライシス」を特集し、「気候が狂暴になっている」と、その現状認識を端的に表現していた。

新型コロナウイルスが社会問題化して以降も、『現代思想』二〇二〇年三月号が「気候変動」を、七月発行の『季刊自治と分権』八〇号が「気候変動と防災」を、『社会運動』四三九号が「いまなら間に合う!気候変動」を、それぞれ特集するなど、さまざまな雑誌で特集が引き続き組まれており、その点では、気候変動に対する問題意識は持ち続けられていると言いうるかもしれない。

その一方で、テレビや新聞によって発信される情報量については、新型コロナウイルスに関するものが圧倒的であり、気候変動に関する情報は、意識的に情報を得ようとしな

ければ、目につきにくい状態になってしまっている。そのことを考えると、新型コロナが社会問題化し、前面に出てくることによって、気候変動の問題が後景に退いてしまったようにも見える。

しかし、ここで、重要になってくるのは、気候変動と新型コロナの問題を、それぞれが互いに退け合う別の問題としてとらえるのではなく、ともに人間社会が自然との関係をどのように構築していくのかということが問われている、同一平面上の問題としてとらえなければならぬのではないか、ということである。

地球温暖化が感染症のリスクを高める可能性については、これまでも指摘されてきたが(例えば、地球温暖化の感染症に係る影響に関する懇談会二〇〇七)、気候変動と感染症との関係は、地球温暖化がもたらす直接的な影響にとどまらない。石弘之が『感染症の世界史』の中で、感染症の歴史を「病気の環境史」と表現したように(石二〇一八、三六〇頁)、感染症は人間社会と自然との関係の持ち方によって生じる病気である。感染症の多くは、動物から人間にうつる「動物由来感染症(人獣共通感染症)(Zoonosis)」であり、例えば、よく知られているエボラ出血熱やSARS、MERSといった感染症